

生育順調。斑点米カメムシ類対策を徹底して目指せ全量1等米！

1 気象情報

(1) 気象経過

アメダスポイント：広野

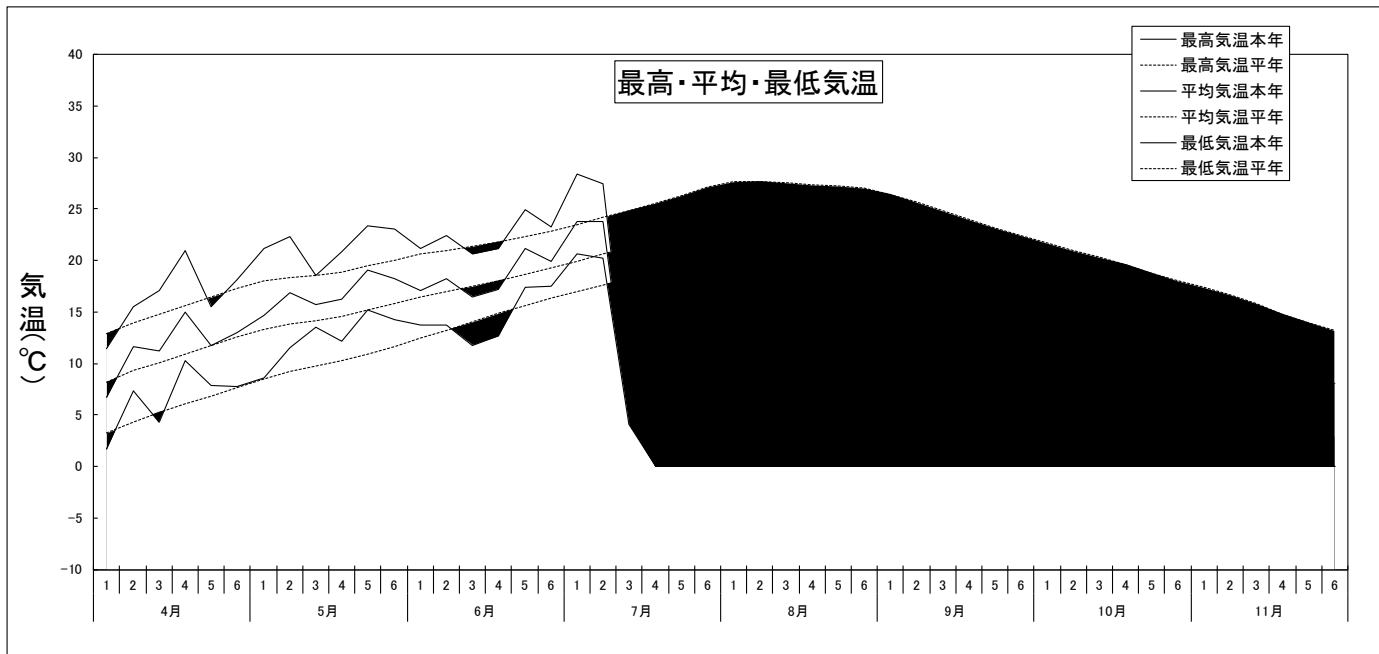


図 1：2017年の気温の推移（～7/10）

(2) 今後の天候の見通し

① 東北地方の1か月予報（平成29年7月13日 仙台管区气象台発表）

1ヶ月予報のポイント	暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間のはじめは、気温がかなり高くなる見込みです。 期間の前半は前線や低気圧の影響を受けやすく、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。
1週目 (7/15～21)	気圧の谷の影響で曇りや雨ですが、期間のはじめと終わりは晴れる日もあるでしょう。
2週目 (7/22～28)	前線や低気圧の影響を受けやすく、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。
3～4週目 (7/29～8/11)	東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。

② 東北地方の3か月予報（平成29年6月23日 仙台管区气象台発表）

3ヶ月予報のポイント	太平洋高気圧の張り出しが強く、暖かい空気に覆われやすいでしょう。このため、向こう3か月の気温は高い見込みです。 向こう3か月の降水量はほぼ平年並の見込みです。
8月	太平洋高気圧の日本付近への張り出しが強い見込みです。東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
9月	天気は数日の周期で変わりますが、暖かく湿った空気の影響を受けやすく、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

2 生育状況 生育順調。

表 1：農業総合センター浜地域研究所作況調査（調査日：7/11、調査地：相馬市）

品種名	年次	移植日	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数	葉色 (SPAD 値)	幼穂形成始期
コシヒカリ	本年	5/10	66.2	817	103	36.2	—
	平年		67.4	674	105	34.8	7/16
	平年比・差		±0 日	98%	121%	-0.2	+1.4
天のつぶ	本年	5/10	63.6	753	100	40.5	7/7
	平年		63.9	628	100	40.5	7/10
	平年比・差		±0 日	100%	120%	±0	±0

表 2：双葉農業普及所作況・展示ほ調査（調査日：7/13）

地点	品種	移植日	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数	葉色 (SPAD 値)	葉色 (カラスケール)	幼穂形成始期
広野町	コシヒカリ	5/2	73.2	470	123	36.3	3.5	7/13
	天のつぶ	5/15	69.1	614	102	45.0	3.8	7/7

3 水管理

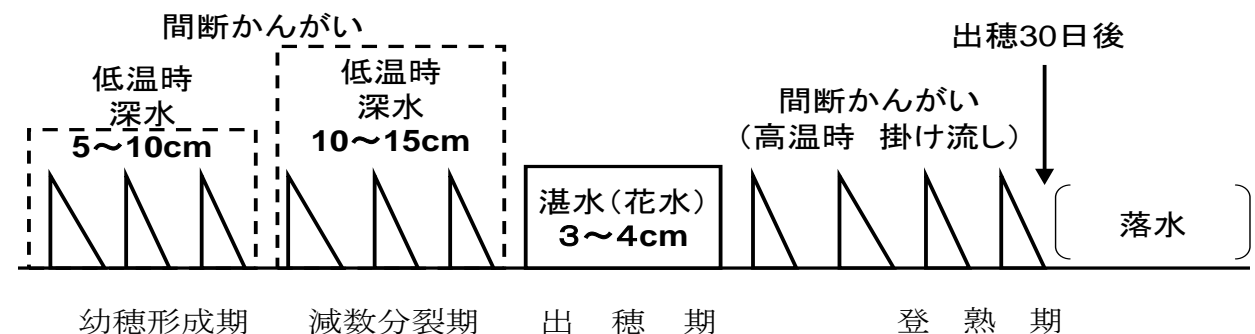


図 2：一般的な水管理イメージ図（7月～9月）

(1) 水管理の基本

- (ア) 幼穂形成期～穂孕み期 → 間断かんがい（冷温（最低気温 17℃以下）時は深水に）
- (イ) 穂孕み～出穂開花 → 湛水（花水）管理。
- (ウ) 登熟期間 → 登熟を良くするため、間断かんがい。
- (エ) 落水時期 → 出穂開花後 30 日間は、田面が白く乾かないようにする。

(2) 低温対策（オホーツク海高気圧に注意！）

- (ア) 幼穂形成期に一度冷温（最低気温 17℃以下）にあった稲は耐冷性が低下し、その後、減数分裂期に再び冷温にあうと不稔の発生が倍加する。
- ※ 最低気温 17℃以下が予想される時には、あらかじめ入水しておく。
水深：幼穂形成期 5～10cm、減数分裂期 15cm 以上

(3) 高温障害対策

- (ア) 登熟中期（出穂後 10～20 日）に日平均気温 25℃以上の高温に合うと乳白粒が発生しやすい。
可能であれば掛け流し、水が潤沢ではないところでは出来るだけ深水にして稲体を冷却する。

4 病害対策(いもち病・稲こうじ病)

7月上旬に、いもち病に感染しやすい天候が続きました。あなたの田んぼでは発生していませんか？

- (1) 葉いもち
 - (ア) 上位葉の病斑は、穂いもちに移行するので、発見次第、散布剤（粉剤、液剤）により防除する。
- (2) 穂いもち
 - (ア) 箱施用剤や粒剤により葉いもちを予防したほ場でも、穂いもちの予防を行いましょう。
 - (イ) コラトップやフジワン等の粒剤は、水深を3cm以上に湛水して散布、7日間は水を動かさない。
 - (ウ) ブラシン等の散布剤（粉剤、液剤）を使用する場合は穂孕み末期と穂揃期（出穂80～90%）の2回散布する。
- (3) 稲こうじ病（穂ばらみ期の低温と降雨は要注意！）
 - ① 穂ばらみ期の低温（13～15℃）と降雨、出穂期以降の高温（25～30℃）で発病が多い。
 - ② 耕種的防除として、窒素追肥は適量とする（多く与えずぎない）。
 - ③ 薬剤散布の場合は、出穂10日前までにZボルドー粉剤DL（3～4kg/10a）を散布する。

5 適期・適量の穂肥で食味・収量向上(コシヒカリ)

- (1) ① 生育診断により 穂肥の可否を（表3）、② 幼穂長から穂肥の時期を判断する（表4）。
- (2) 生育過剰な場合や、曇天や低温が続く場合は、施肥時期を遅らせるか、施肥を控える。

表 3：幼穂形成期における生育診断の基準と穂肥の目安

品種	穂肥の可否を判断			穂肥の時期	穂肥の量 (/10a)
	診断時期	草丈	葉色		
コシヒカリ	幼穂形成期 出穂25日前 (7/15頃～)	70cm 以下	3.0 ～3.3	出穂15日前 (7/25頃～)	NKC6：6～12kg IB4号：7～13kg (N成分1.0～2.0kg)

→ 穂肥が可能な場合、

表 4：幼穂長からみた出穂前日数

生育ステージ	幼穂形成始期		幼穂形成期			減数分裂期	穂孕み期
出穂前日数	26	24	20	18	14	12	6
幼穂長(cm)	0.1	0.15	0.2	0.8～1.5	4.0～6.0	8	18
外形	止葉より下2枚目の葉抽出		止葉抽出		葉耳間長0cm		

↑ ↑ ↑ ↑ ↑

コシヒカリの生育診断時期 コシヒカリの穂肥時期

6 倒伏防止対策

[コシヒカリは草丈が幼穂形成期（7/20頃）75cm以上、減数分裂期85cm以上で倒伏に注意]

- ① 倒伏防止には、中干し、カリの追肥、適正な追肥等を総合的に行う。
- ② 穂肥は生育診断に基づいて行い、過剰な窒素追肥を避ける。
- ③ 上記に気をつけても、明らかに倒伏が予想される場合、倒伏軽減剤を使用する（表5参照）。

表 5：各種薬剤の使用例

農薬名	使用時期	使用量	使用回数	使用方法
スマレクト粒剤	出穂7～20日前	2～3kg/10a	1回	湛水散布
ロミカ粒剤	出穂10～25日前	2～3kg/10a	1回	湛水散布

7 斑点米カメムシ類防除 ～出穂10日前までの草刈りと適切な薬剤防除で目指せ1等米～

6/29県内全域に斑点米カメムシ類の注意報を発表！（県病害虫防除所）

- (1) 草刈り
 - (ア) イネ科雑草の穂は、カメムシ類にとって餌場であり産卵場所でもあるので、穂が出る前に畦畔や周辺の除草を徹底し、カメムシ類の密度を抑制する。
 - (イ) 畦畔の草刈りを、水稻の出穂前後に行うと、カメムシ類を水田に追い込むので、出穂10日前までに終了するように作業を行う。
 - (ウ) 水田内にホタルイ等のカヤツリグサ科雑草が残ると、アカスジカスミカメの繁殖源になるので、水田内の除草管理も徹底する。
- (2) 薬剤による防除
 - (ア) カメムシ類は、水稻の出穂をきっかけに水田に侵入する。このため、出穂の早い水田に被害が集中しやすい。早生品種や移植時期の早いほ場では、カメムシ類の侵入や発生に特に注意する。
 - (イ) 粒剤による防除は、穂揃期～乳熟期を目安に湛水して散布して、その後7日間は止水する。多発が予想される場合は、散布剤により追加防除する。
 - (ウ) 散布剤（粉剤、液剤）による防除は、乳熟期（出穂期の7～10日後）と、その7日後の2回散布を基本とする（表6参照）。
 - (エ) 天のつぶは斑点米が発生しやすいので、乳熟期と出穂20日後の2回、散布剤により防除する。

表 6：カメムシ防除対策の各種薬剤の使用例

農薬名	使用時期	使用量	使用回数
キラップ粒剤	収穫14日前まで	3kg/10a	粒剤と粉剤との合計で2回まで
キラップ粉剤DL	収穫14日前まで	3～4kg/10a	
スタークル粒剤	収穫7日前まで	3kg/10a	粒剤と粉剤との合計で3回まで
スタークル粉剤DL	収穫7日前まで	3kg/10a	
MR. ジョーカー粉剤DL	収穫7日前まで	3～4kg/10a	2回まで



図3：主な斑点米カメムシ類

8 農薬は、容器等の表示ラベルを確認して正しく使いましょう。

各種営農相談の窓口はこちらへ…

J A福島さくら ふたば地区本部 営農経済部 TEL0240-25-3737 または 広野支店 TEL0240-27-3131